鳥屋野潟　ー暮らしと自然の交わりを取り戻すー

東京大学景観研究室
裴・坂本・北川・安藤・平田

鳥屋野潟は、新潟市中央区南部の市街地にあり、周辺にはビッグスワン、県立鳥屋野潟公園、いくとぴあ食花などの施設が整備されています。北区福島潟に次ぐ、新潟市で２番目に大きな潟です。新潟市の１６の潟の中で最も市街地に近接しながらも、その広大な水面には毎年４０００羽を越えるハクチョウが訪れる、都市の中の貴重な自然として、市民の方々から愛されています。

親松排水機場

ビッグスワン

鳥屋野潟公園

歴史分析

亀田郷とその周辺の記録で最古の文献は『続日本紀』（797 年編纂）で、亀田郷付近には沼垂東方の河渡と亀田砂丘上の袋津の二つの集落が開村していたと考えられている。
中世末期：越後国を統一した上杉氏によって鳥屋野潟周辺が新田開発され、鳥屋野潟の周辺にも人が住むようになった。
江戸時代：新発田藩による新田開発が行われ鳥屋野潟周辺には多くの芦沼新田ができた。
明治時代：農業揚水機が導入され郷内には用排水を通すための水路が張り巡らされ最終的に鳥屋野潟に排水されていた。
1941 年頃：国営土地改良事業が着手されて周辺の水田が乾田化された。
1948 年頃：当時東洋一の動力を持つとされた栗の木川排水機場が設けられ亀田郷内の水位が下がった。
1970 年代：周辺の都市化・宅地化によって鳥屋野潟の水質が悪化した。

この頃作家司馬遼太郎が鳥屋野潟を訪れ、「あまりにも平坦な亀田郷の田圃を歩いてきて、水のある景色に飢えはじめたのかもしれない。都会人であるわれわれでさえそのように飢えを感ずるほどだから、住民にとっては水のある鳥屋野潟はそういう意味でも大切であるにちがいなく、」と述べており、鳥屋野潟という水の風景が一面水田と住宅の亀田郷の中で印象的に見えたことがうかがえる。

小林昭栄氏提供

小林昭栄氏提供

かつて、潟の自然は暮らしの場そのものだった。

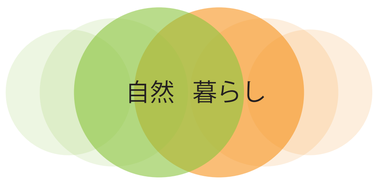
鳥屋野潟は亀田郷において郷内の洪水調節機能を担うと同時に、魚やヒシの実などの食料を供給し低湿な田面を客土する土取り場として住民に利用されてきた。特に潟端の集落の人々は鳥屋野潟の水を洗い物や飲料水に使用するなど生活に利用するだけでなく、冬には湖面でスケートをし、夏には水遊びをするなど子どもの遊びの場となっていた。またヒシ採取や漁業によって生計をたてた人もいた。

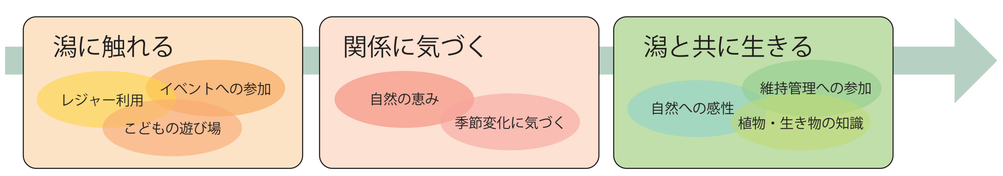
進む都市開発。潟の自然と暮らしをもう一度取り戻すために…

戦後土地改良事業が行われ、新潟は新産業都市に指定されて鳥屋野潟周辺の都市化が進んだ。弁天橋付近は大型車の通行が可能となり、弁天橋付近には旅館・茶屋・売店が並び行楽地として市民に愛される場所となった。その後公園面積の少ない新潟市において、市民の文化活動の拠点にしようと鳥屋野潟南部総合開発計画推進が決定された。湖畔には鳥屋野潟公園・新潟スタジアム・野球場・食育センターなどが建設された。近年鳥屋野潟の資源や暮らしを復活させようと、企業・NPO・地域住民による活動が行われている。

concept
ひとの暮らしと自然との交わりを取り戻す

design
潟一周に陸と水の中間的な環境を形成する





デザインその１．水路の緑道化・公共施設の一体整備

〈課題と地域資源〉
住宅街で潟を感じられる唯一のものである水路は、家の裏を通り、途中で見えなくなったり、潟との繋がりは十分に見えません。　また、潟周辺に立地している多くの公共施設は、魅力的で求心力が高い一方で、周囲が広い駐車で囲まれ、人の暮らし（住宅街）や自然（潟・田畑など）との繋がりが強いとは言えません。

〈資源の活用方法〉
①公共施設 (公園、自然科学館、図書館、野球場など) の一体整備　②水路の開渠化、緑道化　③駐車場の集約・緑化

▷▷将来生まれる暮らしの可能性
・学校に行くときに通る水路の周り、季節への感性が高まる
・潟際まで水路沿いをお散歩
・日頃から子供の遊ぶ水路のお手入れをすることで、潟の水管理に関わりが持てる
・公共施設が気軽に潟の植物や生き物と触れる遊び場になる

水路の開渠化、緑道化

公共施設 (公園自・然科学館・図書館・野球場など) の一体整備

デザインその２．ヨシ原と周辺商業施設の活用

〈課題と地域資源〉
弁天橋周辺には、交通の利便性を活かしつつ、現在は利用されていない大きなヨシ原と点在する商業・宿泊施設を連携させて潟の近くで過ごせる場所をつくることのできる可能性があります。

〈資源の活用方法〉
弁天橋周辺のヨシ原には潟の近くで過ごせるキャンプ場を、その対岸には潟に近づいて読書やキャンプのための遊び道具がつくれる船着場とデッキを整備します。キャンプ場の利用者はヨシ刈り等環境の維持向上にイベントを通して協力することで潟の中・周りにいる実感を持つことができます。

▷▷将来生まれる暮らしの可能性
・鳥屋野潟でママ友とランチ、ボートを眺めながら食べよう。
・ショッピングをしたらボートの乗車券をサービスしてもらった！
・学校帰りにヨシのマットづくりに挑戦。週末のキャンプで使おう！
・趣味のキャンプでお世話になっているヨシ原。
たまには清掃活動にも参加しなくちゃ！

潟の近くで過ごせるキャンプ場

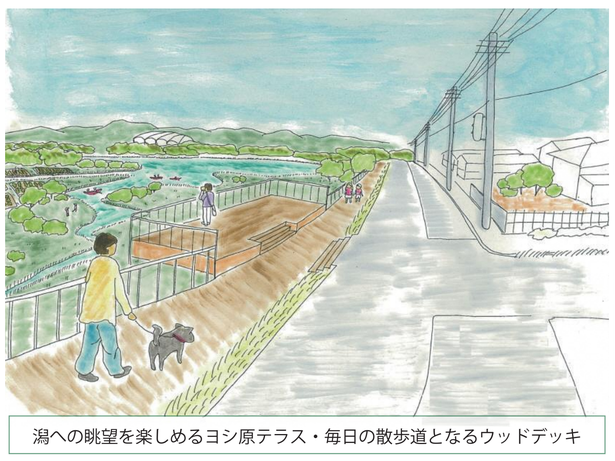
遊び道具づくりができる船着場とデッキを整備

デザインその３．潟沿いの道路とヨシ原の活用

〈課題と地域資源〉
鳥屋野潟の周りには車道がまちと潟を分断している所も多く、潟の風景を楽しみながらゆっくりと歩いたり、写真撮影などを楽しむことができる空間が不足しています。さらに、かつてはこどもが潟で遊ぶ風景が多くみられた上沼地域ですが、いまは潟に近づける場所がほとんどありません。

〈資源の活用方法〉
①散歩道となるウッドデッキとテラスの一体整備　②ヨシ原での農業風景の創出　→　「日常の風景として潟をみる場」を実現

▷▷将来生まれる暮らしの可能性
・ヨシ原テラスまでお散歩しよう。
・鳥屋野潟がライトアップされるから人がたくさん来ている。賑やかになったなあ！
・テラスで写真を撮る観光客をみて、潟の風景の価値を実感。
・潟の端農業体験教室をきっかけに、子供が農業の手伝いをはじめた！


潟への眺望を楽しめるヨシ原テラス・毎日の散歩道となるウッドデッキ

子供が農業体験等もできる潟際農園

デザインその４．治水施設を市民にひらく

〈課題と地域資源〉
現代の鳥屋野潟と共生するのに不可欠なインフラが潟際には沢山あります．例えば排水機場や水門．しかしそれらは黙々と私たちの生活を支え，日常でその恩恵を感じる機会が多いとは言えません．一方で，これらの「潟インフラ」は潟の風景を成り立たせる重要な構成要素とも言えます．

〈資源の活用方法〉
排水機場の定期改修に合わせて、排水機場自体をリノベーションします．排水の様子が外から見える構造を取り入れたり，公民館・図書室などの公共施設と複合させることで，市民にひらかれた排水機場を目指します．水門は自然の素材でリデザインを行い，周辺一帯をパブリックスペースとして整備することで暮らしの場と潟の結節を感じさせる空間の創出を目指します．

▷▷将来生まれる暮らしの可能性
・外からも排水の様子が分かるので．水位の変動が良く分かる．
・排水機場のポンプアップした水を活用して花を育てる室内ガーデンがオープン．排水機場で自習したり，カフェしたりすることも可能に！？
・排水機場の屋上から鳥屋野潟と信濃川を眺め、水の繋がりを感じる．
・地域オリジナルデザインの水門．地域みんなで大事にする．

排水機場を「ひらく」

水門のリ・デザイン（水の循環を日常の中で体感させる空間）

水門デザインの参考：イギリスの木製水門